

写真投影法を用いた小鹿田焼の里の景観の把握と評価—窯元と来訪者との比較—

九州産業大学工学部 学生会員 ○石井克典 馬場直也 九州産業大学工学部 正会員 山下三平
久留米工業大学 大森洋子 龍谷大学 林珠乃 金沢大学 丸谷耕太

1. 序論

1. 1 背景

大分県日田市皿山の小鹿田の里は、焼き物の産地として知られる陶業集落である。小鹿田焼は現在も、伝統的な家族の労働者のみによる生産体制が維持されている。ここは2008年3月28日に、九州で初めて重要な文化的景観の選定を受けた。また2010年2月22日に、周辺地区の山林計画区域についても追加選定を受けた¹⁾。これらの選定の前には総合的な景観調査が行われ、重要な景観資源が網羅されている²⁾。

しかし、その景観資源の表象は直接的に住民の目を通したのではない。地域にふさわしい景観資源としては、住民である窯元/家族の捉えた表象の把握が不可欠であり、また来訪者との違いがどこにあるのかを知る必要がある。

1. 2 目的

そこで本研究は、大分県小鹿田焼の里の景観を、写真投影法により調べ、窯元/家族と来訪者の捉え方の違いを把握する。こうして小鹿田における文化的景観の保全のための基礎的な知見を得ることを研究の目的とする。

2. 研究方法

2. 1 対象地域



図1 対象地域（国土地理院地図をもとに作成）

小鹿田皿山は大分県日田市の中心部より北へ約20km、周囲を山々に囲まれた浅い谷間に位置する山村集落である。1702年に開窯され、1931年に民芸運動の創始者である柳宗悦が初めて小鹿田を訪れ、「日田の皿山」という文章を発表する¹⁾。この紹介以降徐々に知名度を高め、同時に伝統的産地としての認識も広まっていく。その後、1960～70年代にかけて起こった民芸ブーム期

には聖地のような存在になる。その結果、需要が拡大したが窯元がすべての需要を満たしきれなかった。そのため機械を導入する検討を行ったが、「伝統技法が壊れてしまつては、小鹿田焼が死んでしまう」と1971年6月に機械導入を行わないことが決定された²⁾。

2. 2 調査と分析の概要

10軒中7軒の窯元/家族と、来訪者として福岡県の大学生40人（男23：女17）の協力が得られた。本研究では「写真投影法³⁾」を用いた。調査期間と方法・手順は表1に示す。

表1 調査期間と方法・手順

対象	窯元/家族	来訪者
調査年月	2016年5月～6月	2016年7月
方法・手順	①小鹿田皿山らしい風景・景観を50枚を目安に撮影 ②撮ったものを記録 ③撮ったもののコメントを記録	

得られた映像と撮影者の記録に基づいて、撮影対象を窯元/家族14種、来訪者は64種に主対象を分類した。そこでさらに主対象を8種に包括し分類した。この分類には6名の分析者がそれぞれ当たり、協議して最終決定を行った。結果の概要を表2に示す。撮影者の記録は評価という観点から、「肯定」、「否定」、「中立」、「評価なし」に4分類した。

表2 窯元/家族と来訪者の包括分類別主対象の頻度

		窯元/家族							
包括分類	移動・観望(2)	自然(8)	作陶(188)	共有の場所(1)	居住(0)	人間(28)	型性(0)	その他(0)	
主対象	装飾(1) サイン(1)	川(2) 花(2) 木(1)	空(3) 川(2) 焼物(販売)(12) 焼物(自家用)(10) 盛り皿(非種焼)(2) 唐臼(金置)(1)	場所・皿山(1)		人間(25) 人間(訪問者)(1)			
		来訪者							
包括分類	移動・観望(202)	自然(231)	作陶(468)	共有の場所(176)	居住(119)	人間(16)	型性(14)	その他(4)	
主対象	サイン(76) 装飾(73) 道(32) バス停(9) 階段(5) トンネル(3) カーミラー(2) サイドミラー(1) 橋(1)	川(101) 花(36) 山(23) 草(23) 林(17) 木(12) 空(4) 果実(4) 土(3) 動物(2) 昆虫(2) 砂(2) 池(1) 穴(1)	焼き物(131) 唐臼(102) 窯(100) 窯(38) えんとつ(29) 粘土(22) おろ(17) 窯(7) 土(4) 作業棟相(3) 作業道具(3) すりこぎ(1) 輪窯(1)	場所・皿山(100) 茶屋(34) 倉庫(7) 消防設備(7) ポスト(6) 小売店焼物店(5) 休憩所(5) 作業場(1) 共有駐車場(1)	茶屋(83) 車(7) 倉庫(7) 瓦(4) ごみ(3) ハンガー(3) バスケットゴール(1) 一輪車(1) 扇風機(1) 自転車(1) バイク(1) 掃除道具(1)	人間(15) 石碑(14)	型性(14) 写真(2) バス(1) 重機(1)		

3. 結果と考察

3. 1 窯元/家族と来訪者の主対象の比較

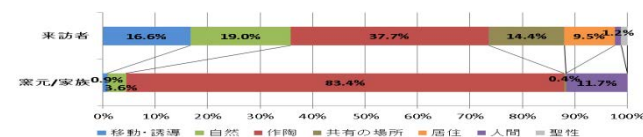


図2 包括分類別主対象の頻度

来訪者と窯元/家族を包括分類別の主対象ごとに比較すると、「作陶」がどちらも一番多く、来訪者(37.7%)は約4割、窯元(83.4%)約8割を占めている(図2)。

その主対象の内訳 (図3) は、「焼き物 (10.78%)」、「唐臼 (8.40%)」、「登り窯 (8.23%)」の順に多く、焼き物の里にある特徴的な景観要素と思われるものに注目しているのが分かる。一方、窯元/家族は、「作業様相 (焼き物を作成する作業工程) (72.20%)」が群を抜いて多く、生活に身近な作業に注目が集中する。(図4)。

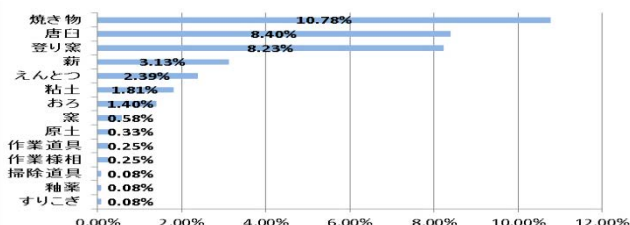


図3 作陶の主対象の頻度 (来訪者)

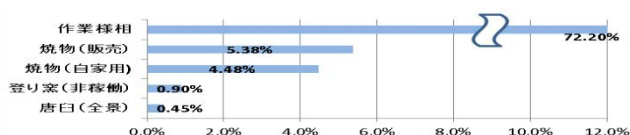


図4 作陶の主対象の頻度 (窯元/家族)

3.2 窯元/家族と来訪者の評価の比較

図5と図6に包括分類別ごとの評価を示し、窯元/家族と来訪者の間で比較する。なお表2のとおり、窯元/家族は「作陶」が圧倒的に多く (186件)、ついで「人間 (26件)」「自然 (8件)」であり、その他は数件に過ぎない。そこでつぎにこれら3項目だけを検討する。

「作陶」については、来訪者は42%が肯定評価である (図5)。一方、窯元/家族の肯定評価は12%と極めて低い。撮影者の記録を確認すると、「まだまだ作らないと…」、「力が必要で、器作りの基礎となる大切な作業だと感じた」等の表現が見られる。「作陶」は生業・生活に身近なため、意識されにくいと考えられる。

図6に窯元/家族による「人間」の評価の割合を示す。肯定評価が約半数近くを占めている。コメントには「目の届く所で勉強もみれて良い環境だなあ～」といった表現が見られる。

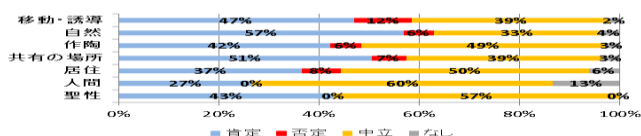


図5 包括分類別評価の割合 (来訪者)



図6 包括分類別評価の割合 (窯元/家族)

「自然」を比較した際に来訪者は肯定が半数を超える。一方、窯元/家族は否定評価が25%である。図7に来訪者の「自然」の評価の割合を示す。「川 (67%)」の肯定評価が2/3を上回る。コメントには「水がきれい」「入りたい」のような表現が見られる。一方、窯元/家族では、「増水して、川幅も広がっています…唐臼が危険!!」といった表現がコメントに見られる。否定的な評価が具体的である。

なお来訪者は「木 (18%)」の否定評価の割合が比較的多く、「手入れが行き届いていない」とのコメントが見られる。

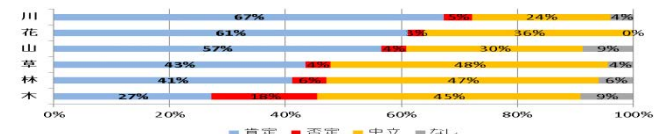


図7 自然評価の割合 (来訪者)

4. まとめ

本研究は小鹿田焼の里を写真投影法により、来訪者と窯元/家族の景観の捉え方の違いを調べた。その成果は以下のとおりである。

- 1) 「作陶」は窯元/家族と来訪者の双方に注目されやすいが、前者は作業の様子、後者は焼き物に最も注目する。
- 2) 「人間」に対する注目度の高さが、来訪者と比べて窯元の顕著な特徴である。
- 3) 「自然」は来訪者にとって好まれているが、窯元/家族にとっては、改善すべきととらえられている。

このように窯元/家族と来訪者との間には、景観の認識・評価に大きな違いがある。とくに窯元とその家族にとって、景観とは作業の様相を表す。したがって小鹿田焼の里における景観の保全は、景観要素の個別の美観に対する規制にこだわりすぎると、地元とのコンフリクトの種になるので注意が必要であろう。

謝辞: 本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業 (基本研究C) の「小石原焼と小鹿田焼の里における文化的景観表象の分析と評価 (代表者: 山下三平)」として行われたものである。

<参考文献>

- 1) 濱田琢司: 維持される産地の伝統～大分県日田市小鹿田陶業と民芸運動～, 人文地理第54巻第5号, pp1～21, 2002.
- 2) 日田市: 小鹿田焼の里文化的景観保存計画 (第3版), 2010.
- 3) 山下三平・丸谷耕太・内山忠・栗田融: 写真投影法による陶芸の里の表象分析と評価, 景観・デザイン研究講演集 No. 10, pp139～146, 2014.